

## ～東京農大と協力隊～

独立行政法人国際協力事業団（JICA）が実施する海外ボランティア派遣制度の青年海外協力隊が発足50周年を迎えた。1965年に初代隊員26人（うち7人が東京農大OB）をラオスなどへ派遣して以来、アジア、アフリカ、中南米等世界88カ国で約4万人が活動を展開してきた（派遣期間は原則2年）。その間、東京農大が送り出した協力隊員は1,000人を超える。日本で最も多くの隊員を輩出している大学だ。東京農大は協力隊とともに歩んできたといっても過言ではない。その歴史を振り返り、これから協力隊員をめざす学生たちのための記念シンポジウム「東京農大と協力隊」(東京農大創立125周年記念事業)が6月20日、世田谷キャンパスの農大アカデミアセンター「横井講堂」で開かれた。パネルディスカッションに参加した協力隊として活動経験のあるOB、OGは、いまもひたむきな姿勢と情熱を持ち続け、後輩たちに熱く語りかけた。

### 農業による国際協力の本流

最初にあいさつに立った高野克己学長は「東京農大は地域、社会、世界に貢献することをめざしているが、さらに大学のグローバル化に努めていく。そうした中で、青年海外協力隊で多くの卒業生が活躍してきたことは誇るべきことだと思っている。現役学生たちもそうした先輩たちの背中を追ってほしい」と語った。また、1978年農業拓殖学科を卒業しJICAに入り、2012年からJICA理事を務めている黒柳俊之氏が「東京農大は50年間、毎年欠かすことなく協力隊に人材を送り込んできた。帰国後に活躍している姿にも注目している。協力隊での経験は人間を大きくする」などと述べ、若者の参加を呼び掛けた。

次いで、東京農大国際協力センター長の志和地弘信・国際農業開発学科教授が、協力隊との関わりや海外協定校が31校になっているなど国際交流の現状を説明した。また、東京農大創立125周年記念事業として東京農大国際センターの建設計画も披露した。世田谷キャンパスに造られる東京農大国際センターは国際会議場、交流ラウンジ、国際資料室、宿泊施設などを併設し、協定校の教職員、内外の卒業生や関係機関が交流できる場となる

東京農大に実践教育をモットーに海外に雄飛する人材を育てることを目的にした農業拓殖学科（国際農業開発学科の前身：1991年に改称）が設置されたのは1956年。協力隊発足前から海外での農業開発支援活動が行われていた。65年に協力隊が発足すると、協力隊審議会の農業分科会委員が東京農大から選出され、協力隊事業を支援していくことになる。同年7月には学内に農業拓殖学科長を委員長とする応募者選考委員会を設置した。この年に選抜された7人は全員隊員に採用され、12月24日に第1次隊第1陣として2人がラオスに出発した。翌年1月9日にカ



志和地弘信教授



新保昭治氏

ンボジアに1人、同15日にマレーシアに2人、2月22日にフィリピンに2人が派遣されている。



この第1次隊としてフィリピンに派遣された農業経済学科OBでJICA中国事務所長などを務めた新保昭治氏は「当時、農協に勤務していたので協力隊に参加するのは正直、逡巡した。しかし、2年間フィリピンで現地の住民と生活し、異文化を理解することの大切さを知った」と思い出を語った。

### 情熱は受け入れられる

パネルディスカッションは「これから協力隊をめざす在学生へのメッセージ」をテーマに行われた。

最初にパネリスト3人が経歴（別項参照）を紹介。

**司会・武下**：協力隊での2年間が皆さんにどんな影響を与えたのか。何を得たのか。

**五野**：(大学院時代からマラウイの農業政策と農村設計の関係を研究テーマにしている) 現地の人はモノを持っていない。だけど、作りだす力を持っている。ギターとかドラムとかの楽器でも——。何かを創りだす発想力、エネルギー、考え方を学んだ。公務員を辞めて、今の仕事についたのも「再びアフリカに戻りたい」との思いが強かったから。後悔はしていない。

**矢島**：(協力隊での経験を生かし故郷の群馬で地域の



■パネルディスカッション■ (写真右から。敬称略)

司会:

武下悌治(たけした・ていじ) = 1980年農業拓殖学科卒業。82年から協力隊の園芸作物の隊員としてパプアニューギニアに。85年協力隊パプアニューギニア調整員、88年在ナイジェリア日本大使館に専門調査員として勤務。90年JICAへ入り、農業開発部、無償資金協力事業部、フィジー事務所長を歴任後、2011年から13年まで協力隊事務局事務局長。

パネリスト:

柿沼潤(かきぬま・じゅん) = 1985年農業拓殖学科卒業。95年東京農大大学院修士課程修了。2011年ロンドン大大学院東洋アフリカ学術院修士課程修了。1986年から協力隊野菜隊員としてエチオピアに。96年JICAジュニア専門員として北欧アフリカ研究所(スウェーデン)に派遣される。98年から民間開発コンサルティング会社の主任研究員。

矢島亮一(やじま・りょういち) = 1987年農学科卒業。2006年宇都宮大大学院修士課程修了。1999年から協力隊野菜隊員として中米パナマ共和国に。帰国後の2001年から地元群馬県にNPO法人自然塾寺子屋を設立。国際協力事業や地域活性化、青少年育成など「農村から日本と世界を元気に!」をテーマに活動

五野日路子(ごの・ひろこ) = 2007年国際農業開発学科卒業。同年協力隊村落開発普及員としてマラウイに。帰国後、東京農大大学院国際農業開発学専攻に進み、12年博士前期課程修了。その後、国家公務員として3年間勤務。15年から東京農大国際食料情報学部国際農業開発学科助手。

人と協力隊との橋渡しをやっている) 貧しいといわれる国に行って「本当の幸せって何だ」ということを強く感じた。そこで生きる力を感じ、自分の情熱が燃え上がってきた。熱く生きていくことの大切さを気づかせてくれた。協力隊での経験があったからこそ、今の自分の活動がある。

**柿沼:** (高校3年の時から、アフリカで働きたいと思っていた。現在も協力隊での活動と同じような仕事をしている) 三つある。一つは実学の重要性。ともかく行って、見て、触ってみなければ分からない。実体験の強さといったもの。二つ目は多様な価値観と視野。もうひとつが、いかに人と信頼関係をつくることの重要性。現在も現場主義でプロとしての仕事をやっている。

**武下:** 皆さん、人間性を磨いて戻ってきたことが分かる。日本での活動に経験が生かされている。「協力隊から帰ってきて就職できるのか」といった不安を抱く人もいると思うが、学生へのメッセージは。

**柿沼:** ①有言実行

②守備範囲を広げる (いろいろな分野に目を向

ける)

③開発援助にはトレンドがあることを知る

④継続は力なり

⑤東京農大の持つネットワークの活用 (先輩を頼る) ——を送りたい。

**矢島:** ためらわずに、とりあえずトライすること。ハードルが高いと感じることがあっても、気力、体力があふれている若いうちに挑戦してほしい。

**五野:** 東京農大には海外協定校が多くある。いろいろな制度を活用して外国に出て行ってほしい。その際は、必ず目的を持って行き、次のステップにつなげてほしい。

**武下:** もちろん、語学力を身につけ、実践力を養うことが大事になる。

(発言内容は要旨。敬称略)

パネリストの3人に共通するのは、「自分がめざしているものに対する意識の強さ・情熱」といったもの。そして、口をそろえて「協力隊の経験は現在の仕事に役立っている」と言い、それぞれの立場で精力的に活動している姿がうかがえた。

(学校法人東京農業大学参与 谷口 弘)